



圖書 和圖書 遡

0.4285



a 1 3 8 0 3 2 7 4 4 5 a

福岡教育大学蔵書

永田健助譯述

第一帙 農業篇

# 農工商經濟論

明治辛巳冬十月

思誠館開鐫



和盤所

藤本編校

原書ハ佛國學士會院ノ學士レバツシ

一、ルウラバアンジストリール、イ、コメルシイ  
 ルト題シ一千八百七十六年佛京巴里ニ於テ  
 刊行スル所ナリ其重要ハ學校ノ教科ニ供ヘ  
 タル者ニシテ時ニ該國文部省布告、綱領ニ  
 基ツキ編著セル者ナリ  
 一原書ノ大意ヲ分ツテ四篇ト為ス第一篇ハ經  
 濟學ノ原理ヲ略論シ已下三篇ハ農工商三民

思誠館藏

ノ經濟ヲ説明シタル者ナリ即チ第一篇ノ旨趣ヲ擴充シテ人間事業ノ各科ニ適用シタルモノナレハ看者幸ニ尋常ノ經濟書ト同一視スル勿レ

一本編ニ於テ原書第一編ヲ省略スル者ハ己ニ世上ニ流布セル經濟書ト大同小異ナルヲ以テナリ且ツ之ヲ省クモ以下三篇ノ意ヲ害ナフコトナク殊ニ書冊ノ甚タ浩漭ニ過キザランコトヲ欲スレハナリ

一本書全部ヲ分ツテ農工商ノ三帙ト為ス者一

ハ看者ノ便ヲ計リ一ハ農工商ヲ論セス各其欲スル所ノ學科ニ適センカ為メナリ  
一文中辭句ノ間ニ點圈ヲ附スル者ハ題言釋義及ヒ旨趣ノ眼目ヲ表シテ讀者ノ思想ヲ換起センカ為メナリ其他度量等ハ譯シテ分註ト為シ且佛國外ノ地名ハ大概改メテ英音ト為ス蓋シ邦人ノ耳ニ慣ル、ヲ以テナリ看者宜シク之ヲ領スベシ

明治十四年十月

農工商經濟論總目錄

農業篇

第一回 土地家産

○土地ヲ私有物ニ供スルヲ○私有産ノ廣狹○土地家産ヲ分派スルヲ○地主及ヒ農夫

第二回 耕作

○農業開進ノ四期限○農耕ノ財本○牧野耕作○種植交替耕作法○佛國ノ草質物ノ耕作○佛國家畜ノ保養○田圃ヲ處分スル法○佛國ニ於テ山林樹木耕作

第三回 輸出便路

○道路交通ノ便 ○都府及ヒ市 ○農産物ノ輸出入 ○農  
耕ノ道ヲ講習スル

以上上下二冊 農業篇終

工業篇

第一回 人間及ヒ勤勞

○工業ノ類別 ○諸工業ヲ集成スル ○勤勞ノ分科 ○  
工藝教育 ○智心ノ分 ○工業ニ於ル學術及ヒ技藝 ○工  
業上ノ發明創成ノ所有權

第二回 財本

○財本ノ素性 ○財本ノ使用 ○財本ヲ更新スル ○

財本ノ本分 ○有生産及ヒ無生産財本 ○不動財本 ○器  
械 ○流通財本 ○財本ノ結合

第三回 財本ト勤勞トノ關係ノ事

○財本ノ利潤 ○利子ノ價 ○起業者ノ利益 ○勞銀 ○  
勞銀ノ相場 ○勞銀ノ貯蓄 ○勞銀ノ批評 ○職工協同  
會

第四回 勤勞ノ沿革及ヒ制度

○奴隸ノ勤勞 ○百工協同會 ○佛國ノ百工共同會 ○勤  
勞ノ自由 ○勤勞自由ノ利益 ○工業上ノ競争 ○商律 ○  
失敗及ヒ倒行 ○商法裁判所 ○業主ト傭人トノ關



係○職工ノ戶籍簿○工人ノ徒黨○「コンセルル、デ、プリ  
ウドム」職工ト製造家トノ○商法會議所○百工製造會  
議所

以上三冊工業篇終

### 商業篇

#### 第一回 商賈及ヒ商貨物

○貨物直貿易及ヒ賣買○商業○各種ノ商賈○内國貿易  
及ヒ外國貿易○輸入及ヒ輸出○關稅○交易上物産ノ  
地理○通商交易ノ文明開化ヲ誘導スル

#### 第二回 貿易ノ媒介物

○貨物ヲ排出スル方便○海陸路○貨幣ノ性質及ヒ本  
分○貨幣ノ制度○金銀貨幣ノ價值○信用ノ性質○信  
用ノ主要ノ方法○賣買手形○銀行ノ水分○銀行  
ノ機關○銀行紙幣及ヒ發行銀行○不交換紙幣○銀行  
紙幣發行ノ方法○佛蘭西銀行○諸國著名ノ銀行○通  
貨及ヒ貨物ノ運轉○商業轉變ノ機

#### 第三回 商業ノ沿革

○アニヤ人○希臘人○羅馬帝國ノ商況○亞喇伯人  
○意太利及ヒハンセイ○葡西人○佛蘭西及ヒ英蘭○  
歐洲大陸ノ封港○亞米利加ノ獨立○東洋及太平洋中

○歐人ノ通商○關稅ノ沿革○海陸商業ノ通路○今世  
人民ノ生産力○自由交易  
以上五冊商業篇終

農工商經濟論總目錄終

農業篇附言

夫レ人間衣食住ノ基ハ農ニ在リ故ニ衣食住ノ  
方異ナレハ農作モ亦自ラ多少ノ異同ナキヲ得  
ス例ヘハ我邦人カ米穀及ヒ魚類ヲ以テ貴重ノ  
食料ト為スモノハ猶歐米諸國ノ人民カ小麥粉  
及ヒ肉類ヲ用フルカ如シ蓋シ歐米諸國ノ農作  
ヲ觀ルニ家畜(牛羊馬及ヒ豚類)ハ必ス田圃ニ附  
屬ヤル者ニシテ如何ナル小農トイヘ氏自己ノ  
耕地ヲ有スレハ必ス多少ノ家畜ヲ養ハサルハ  
ナシ是レ一ハ耕作ニ使役シ一ハ肥料ヲ醸生セ

シメ一ハ賣物ト為セハナリ我國ノ如キハ然ラ  
 ス家畜ハ唯牛馬ニ止リ之ヲ僅々耕作上ニ用フ  
 ルニ過サル耳凡ソ耕作ハ古來因襲ノ慣習及ヒ  
 耕地大小ノ制等アルヲ以テ其方法ハ容易ニ變  
 更シ難キ性質ノ者ナレトモ以來新クニ開墾ニ屬  
 スベキ土地ハ歐米ノ制ニ倣フテ耕種ノ方法ヲ  
 施スバ爾ベカラス我政府モ亦夙ニ茲ニ注意ス  
 ル所アリ是レ下總國印幡郡種畜場ノ設立アル  
 所以ナリ

本篇ハ佛國農耕ノ現狀ヲ視察シ其利害ヲ説ク

者ニシテ凡ソ農業上ノ經濟ニ於テ網羅遺ス所  
 ナシ抑佛國ハ歐洲大陸開化ノ中心トモ稱スベ  
 キ國ニシテ殊ニ農業ハ古來人民ノ刻苦勉強シ  
 テ講究スル所タルノミナラス其田圃ノ廣狹及  
 ヒ大小ノ制度等モ亦頗ル中道ヲ得タル者ナリ  
 ト云フ本篇ハ固ヨリ佛國ノ農制ニ就テ論スル  
 所タリ實際上ニ至テハ多少我國ノ農制ニ合ナ  
 ハサルコトアルベシトイヘトモ唯一意ニ佛國ノ農  
 制ヲ説ク者ニアラス農作自然ノ理ト經濟上ノ  
 主義トヲ斟酌シテ其利害ヲ通論シタル者ナレ



ハ敢テ我農耕上ニ適セサルニアラズ苟モ農家  
ハ本篇ノ主義ヲ講究シテ逐次我農耕上ニ施行  
スルニ至ラハ其裨益豈淺歟ナランヤ我輩ハ左  
ニ我邦現時ノ農況ヲ輯録シ辨カ讀者ノ参考ニ  
供セント欲ス然レモ此事タル確實ナル物産統  
計表ノ據ルヘキ者ナキヲ以テ其鹵莽杜撰ノ責  
ハ固ヨリ免レサル所ナリ讀者其レ之ヲ諒セヨ  
古來我日本ハ農ヲ以テ成立ツ國ニシテ人民概  
ネ耕作ニ從事セリ蓋シ天然地理ノ然ラシムル  
ト近年ニ至ルマテ鎖港主義ヲ政略ト為シ世界

萬國ト通商貿易ヲ行ハサルノ致ス所ナラン故  
ニ唯自然天生ノ物品ヲ産出シテ自國人民ノ需  
用ニ供スルノミニシテ畢竟自ラ作りテ自ラ食  
フニ過キサレハ百工製造ハ萎萎シテ振ハス之  
ヲ耕作ニ比スレハ宛モ晨星ノ寥々タルカ如シ  
前日封建政治ノ時代ニ方リ京都ニハ朝廷アリ  
江戸ニハ徳川將軍ノ霸府アリ各州各郡ニハ二  
百六十餘ノ大小諸侯有リテ各自一政府ヲ設立  
シ其旗下ニハ數萬ノ武臣ヲ養ヒ又之ニ從屬セ  
ル家族二百有餘萬アリ其他官祿ヲ仰テ生活セ

ル僧徒二十餘萬アリシト云フ是皆全國農作上ノ賦稅ヲ以テ扶持シタルモノナリ  
按スルニ我邦ハ北緯四十六度以南ニ向ヒ連綿トシテ南北十五度ノ間ニ亘レル國ニシテ耕地ノ面積ハ各緯共ニ海面ヨリ漸ク昇リテ一千萬尺ニ至リ季候ハ凡テ溫帶ニ屬セリ全國ヲ舉テ耕耘ニ適セル土地ノ概數ハ二百〇九億萬町ヲ以テ算スベシ而シテ現今耕作スル者ハ尚其四分ノ一ニ過キスト是レ道路ノ便未タ開ケサルト海陸運輸ノ法未タ遍ネカラザルトニ外ナラ

ズ今日民間物品ヲ運搬スル多クハ人畜ノ背負ニ由ル其不便ナル亦甚シト云フベシ  
耕耘ノ方法ハ各田圃ヲ區畫シ最小ナル者ハ僅ニ二畝或ハ一畝ニ至ルアリテ水邊山隅ニ到ルマテ種植耕耘ノ周到セサルハナシ其耕作ノ周密ナル蓋シ歐米諸國ニ於テ其例ヲ見サルヘシ然レモ之カ為ニ各耕地ノ處々ニ散在セルト時々事業ヲ變更セサルヲ得サルトニヨリ空シク時間ヲ費スル數カラス是レ經濟ノ理ニ背クノ甚シキ者ト云フヘシ之ヲ要スルニ我國ノ耕作

法ハ所謂歐米ノ菜園耕作ナリ  
 前條既ニ論スルカ如ク從來我國ノ耕作上ニハ  
 毫モ家畜ノ附屬スル者ナク僅ニ耕耘駄用及ヒ  
 乗用ノ為ニ牛馬ヲ飼養スルノミ然ラハ則夫ノ  
 歐米諸國ニ於テ耕地ヲ肥沃ナラシムル本源ナ  
 ルモノ我日本ニ在リテハ絶ヘテ無シト云フモ  
 亦可ナリ歐米諸國ニテ肥料ニハ首トシテ家畜  
 ノ糞料ヲ用フレモ我國ニテハ農家カ自ラ獲ル  
 所ノ肥料ハ唯人糞ノミニシテ其分量ハ固ヨリ  
 限リアリ故ニ今日ノ耕作法ヲ以テ之ヲ論スレ

ハ後來農耕ノ進歩スル謂ハレナキナリ顧フニ  
 北海道ハ勿論東北地方ニ至レハ所在廣漠ノ沃  
 野多シ自今以來牧畜ノ業ヲ盛ニシ農民ヲシテ  
 肥料ヲ調製スルノ方法ヲ知ラシムルニ至ラハ  
 物産ノ増殖スルノ期シテ待ツヘキナリ  
 蓋シ我國ノ主産物ハ米穀ニシテ到處ニ之ヲ産  
 殖セサルナシ而シテ耕地ノ過半ハ全ク稻田ニ  
 シテ河海ノ水濱山谷及ヒ山下ノ邊隅ニ至ルマ  
 テ凡ソ低下ノ地ハ悉ク稻田ナラサルハナシ歐  
 米諸國ハ然ラス其地率々ネ稻田ナキヲ以テ人

民重ニ小麥ヲ食料ト為セリ我國ニ於テ小麥ノ耕作ハ僅々ニシテ農民ノ主要ナル食料ハ大麥ナリ

砂糖ハ重ニ日本南方諸國及ヒ島嶼ニ産出シ北緯三十六度以南ニハ年々各地ニ於テ多分ニ産出セリ然レモ開港以來人民ノ需求大ニ増加シテ明治十二年間ニ其外國ヨリ輸入シタル總額ハ六千七百四十三萬四千八百〇五磅ニ至レリ租稅局調輸入斯ク需要益多クシテ其産出ヲ促出表ニ據ルスニヨリ内國砂糖耕作ノ景況ハ隨テ年々盛大

ニ赴ケリ殊ニ昨年ハ大坂ニ砂糖共進會ヲ開キ益其製造ヲ督勵ス顧フニ數年ヲ出ズシテ外國製品ヲ仰カス内國ノ需求ヲ給スルニ至ラント期シテ待ツヘキナリ

又我國ニ於テ耕作セル大小豆類ハ其種類最モ多シ外國人某ノ説ニ凡ソ世界中日本ノ如ク斯ク多ク食料中ニ豆類ヲ用キルノ處ナシト今日耕作セル豆ノ種類四十餘種アリト云フ蕃薯ハ緯線四十度以南ニ於テハ到處ニ之ヲ産出セサルハナシ凡ソ五種アリ中ニ就キ三種ハ日本ノ

純産ナリト是レ大ニ人民ノ食料ト為ル者ニシ  
 テ處トシテハ秋季ヨリ冬月ニ至ルノ間ハ專ラ  
 之ヲ食料ニ供セリ又馬鈴薯ノ耕作ハ至テ以ク  
 僅ニ在留外國人ノ食用ニ充ルニ過キズ  
 茶ハ今日我國重大ナル農作ノ一科ニシテ之ヲ  
 産出スル面積及ヒ價額ハ固ヨリ米穀等ニ比シ  
 難シトイヘトモ商貨物トシテ外國ニ輸出スル  
 ニ至テハ最モ緊要ナル位置ヲ占ル者ナリ其輸  
 出高ハ年々ニ増加シ明治一年ニハ僅ニ五百萬  
 磅ナリシカ明治十三年ニ至テハ漸ク増加シテ

四千萬磅ノ巨額ニ達シタリ而シテ同年ノ産出  
 總高ハ九千萬磅ナリト云フ現今茶ハ緯線四十  
 度以南ニ於テハ處トシテ之ヲ培養セサルハナ  
 シ  
 桑樹ハ重ニ北緯二十五度ヨリ四十度ニ至ルノ  
 間ハ到處ニ之ヲ種植セサルナシ中央諸縣ニ於  
 テハ岩手、宮城、山形、福島、群馬、埼玉、栃木、千葉、茨木、  
 神奈川、長野、山梨、静岡、岐阜、石川、滋賀、京都府等ヲ  
 最トス是ヨリ先キ十年來外國輸出ノ需求年々  
 ニ増加シテ殆ト其産出高ヲ倍蓰セリ故ニ爾來

大ニ荒蕪地ヲ拓キテ桑園ト為セル者最モ多シ  
 明治十二年賦税ヲ課シタル生糸ノ産出高ハ洋  
 銀三千一百二十五萬弗ナリ勿論内國ニテ使用  
 スルモノ、價額ヲ算スレハ其數尚甚タ多カル  
 ヘシ

木綿ハ開港以來漸ク外國ノ輸入品ニ壓セラレ  
 テ近年大ニ内國ノ産出高ヲ減シタリト云フ實  
 ニ惜ムヘキナリ

以上述ル所ハ我邦現今農産中重ナル者ノ一斑  
 ヲ掲ケタルナリ願フニ將來外國ノ精巧ナル農

具器械ト其耕耘ノ方法トヲ採用セハ農業ノ模  
 様ヲ一新シ人カヲ勞スルト少ナクシテ産物ノ  
 收額必ス巨萬ヲ加フルニ至ラン我邦經濟ノ大要  
 之ヲ舍テ、別ニ良法ナカルベシ是我輩ノ熱心  
 此編ヲ譯スル所以ナリ

永田健助識



農業篇附言終

禮部經濟論卷之一

農學學校

農業篇上卷

東京

永田健助

譯述

第一回

土地家産ノ事

○土地ヲ私有物トナス。凡ソ人ハ其勤勞ト  
 自主自由トニ由リ天地間ノ萬物ヲ以テ己カ私  
 有ニ供ス是レ人ノ物品ヲ有スル所以ノ本源ナ  
 リ然レモ人間社會ニ於テ自ラ法律アリテ此權利  
 ヲ證認スルノモナラス且社會ノ間ニ於テ正シ

ク此權利ヲ使用スルノ方法ヲ規定セリ而シテ  
 世界萬國時ノ今古ト化ノ文夷トニ隨ヒ人ノ勤  
 勞ノ結果ニハ各種異同アリ又法律ノ之ヲ定ム  
 ル所モ自ラ其方法ヲ異ニセリ動産及ヒ不動産  
 ノ性質并ニ其關係及ヒ増殖移動ノ方法ニ於テ  
 大ニ相異ナル所以ハ蓋シ此ニ外ナラサルナリ  
 爰ニ余カ説明セント欲スルモノハ專ラ不動産  
 ナル土地私有ノ件ニ係レリ夫レ不動産ハ一種  
 特異ノ私有物ナリ其故何ソヤ凡ソ土地ハ其地  
 方ニテハ廣狹多寡ニ於テ變スルトナク其生産

力及ヒ其價直ニ於テ變スルヲ得ルモノトレハ  
 之レニ特別ナル經濟上ノ成果ヲ生スルト凡ソ  
 萬國殆ト往古ヨリ常ニ之ヲ所有スル者ニハ自  
 ラ多少ノ政權ヲ附着スルトヲ以テナリ  
 土地ハ人ノ草昧ノ世ヨリ最モ熱心シテ要求シ  
 タル私有物タラサルナリ看ヨ野蠻ノ民ハ第一  
 ニ武器ト食料トヲ得ルトニ從事シ牧畜ヲ業ト  
 スル民ハ牛羊ヲ得ルトニ從事シタルヲ然レレ  
 此等野蠻ノ世ニ在テモ人既ニ土地ハ其部落人  
 民ノ共有物タルトヲ認メテ各部落其固有ノ狩

場若クハ收場ヲ占領シ其近隣部落ノ人民若シ  
 之ヲ侵スモノアレハカラ究メテ防禦シタリキ  
 土地ヲシテ各人一個ハ私有ニ供セハト欲スル  
 情意ハ最モ人心ニ發育スルハ期ハ人民漸ク進  
 テ專ラ農耕ヲ營ムハ時ニ在リ己ニ此期ニ至レ  
 ハ人々自然山野ニ生長セル草根及ヒ果實ヲ食  
 ヒテ満足トセス各自所好ノ食物ヲ産出セント  
 欲スルニ至ル然レモ當時土地ハ生産ニハ欠ク  
 ハカラサル具ト為リ人々之ニ播種シテ之ヲ耕  
 ヤシ之ヲ耘キルニ非レハ其所好ノ物品ヲ産出

スルコト能ハサルノモナラス此時ヨリ土地ハ財  
 本ヲ含有シテ多少ノ價ヲ有ツニ至リ農夫モ自  
 ラ勞シテ之ヲ開拓シタルト將來ノ所得ヲ期望  
 スルトニヨリ自ラ我所有物トシテ之ニ固着ス  
 ルニ至ル蓋シ土地ハ此ヨリ人ノ私有物タル標  
 號トモ稱スヘキ人造物トナリタレハナリ實ニ  
 何レノ國トイハレ其土地ニ勤勞ヲ積ムコト愈多  
 ケレハ土地ヲ愛スルノ精神ハ益人心ニ固着ス  
 ルナリ

澳太利土蕃ノ如キ最モ野卑ナル人民中ニ部落

共有産ヲ保ツノ情意殆ト行ハレサル所以ハ此  
等ノ民ハ其目的トスル所ノ勉業ナキヲ以テ一  
モ土地ニ固着スルノ理由ヲ有セサレハナリ北  
亞米利加ノ土蕃中ニ於テハ新世界發見ノ時ス  
ラ已ニ共有産ヲ有ツノ情意大ニ人心ニ浸潤ス  
ルヲ見タリ蓋シ蕃民ハ各自村落ヲ結ヒテ漁獵  
ヲ事トスルノミナラス多少土地ヨリ物産ヲ收  
獲シタレハナリ又韃靼人及ヒ亞刺比亞人ノ如  
キ牧畜ヲ生産ト為ス人民ニ在テハ共有産ヲ保  
ツノ情意ハ最モ強ケレド私有産ノ情意ハ唯其

萌芽ヲ發生セルノミ此部落ノ酋長ハ往々其配  
下ノ人々ノ一家族中ニテ年々耕作スヘキ土地  
ヲ配當スルヲアリ又耕夫モ往々一回其田野ヨ  
リ收穫ヲ為スノ後ハ播種ノ勞容易ナル他ノ田  
野ニ往キテ之ヲ耕ヤシ固ヨリ其土地ノ各部ヲ  
改良スルニ足レルノ勞ヲ費スノ意ナケレハ勉  
メテ之ニ固着セサルナリ  
之ニ反シ既ニ開化セル人民中ニハ共有産及ヒ  
私有産ヲ有ツノ情意兩ツナカラ最モ熾ナリ然  
レモ私有産ハ夥多ノ物品ヲ産出スルニ最モ便

利ニシテ且數多殷富ナル人民ノ需要ニ最モ善ク適スルモノナレハ人々ノ之ヲ欲スルノ情意ハ愈甚シ故ニ斯、ル國ニ在テハ凡ソ耕耘セル者ト否トヲ問ハス一項ノ田トイヘ氏人ノ所有ニ屬セサルモノ無キナリ

人民尚未タ耕作ヲ專業ト為スノ時代(此時代ハ往々數百年間繫續スルヲアリ)ニ在テハ學術ノ力モテ能ク人ノ作業ヲ完全ナラシメサルカユエニ移動財本ハ稀少ニシテ凡ソ財本ハ殆ト全ク土地ノ吸含スル所ナリ當時土地ハ所有物ハ

富有ト權カト再ツナカラ集中スル所ナリ然レ

氏國運漸ク進テ人民百工製造ヲ業ト為スノ時

代ニ至テハ學術ノ功用ヲ假テ財本ヲ使用スル

ニヨリ移動ノ富益増殖シテ隨テ土地モ亦大ニ

價格ヲ得ルニ至ルトイヘ氏從來之ニ固着シタ

ル權カハ特典ヲ失フニ至ル蓋シ之ト威力ヲ頡

頡スルヲ得ヘキ移動産ノ起ルアレハナリ

○私有地ノ廣狹 吾人苟モ世界萬國人民ノ農

業經濟ノ情況ヲ講究セハ人々ノ私有地ニ大中

小ノ區別アルハ必ス其國開化ノ大法ト親密ナ

ル關係ヲ有ツモノタルヲ見ルヘシ  
 一人ニシテ廣大ナル土地ヲ私有スルヲ要スル  
 モハハ獵獸又ハ牧畜ヲ生産トスル人民ナリ蓋  
 シ野ニ牛羊ヲ牧スルカ為ニハ廣大ノ場處ヲ要  
 スルノミナラス況ヤ獵ヲ生産トシテ禽獸ヲ獲  
 スルニ於テヲヤ然ルニ農耕ノ生産ハ大中小共  
 ニ適セシムルモノナリ  
 然レ氏凡ソ人民野蠻ノ域ヲ脱シテ漸ク開明ノ  
 域ニ進歩スルノ程度ハ一朝一夕ノ事ニ非ラス  
 而シテ國ニ大家産ノ起ルモ亦其國古來因襲ナ

ル經濟ノ情況ニ因ルカ若クハ外人ノ侵畧ニ逢  
 フテ農政ヲ一變シタルニ歸スヘシ之ヲ例スル  
 ニ上古羅馬人ノ侵畧以後意大利ノ景況又中古  
 ニ至リ慄悍獍猛ナル蠻部ノ大入寇後西歐羅巴  
 全洲ノ景況等是ナリ封建政治ノ世ニ於テハ人  
 ノ意見尚狹小ニシテ國家ナル思想ハ曖昧模糊  
 タル中ニ在ルカユヘニ土地ヲ占有スレハ則其  
 地主タルヲハ勿論尚其王侯ニシテ小許ノ所有  
 地ハ其地主ヲシテ王侯タラシムルニ足ラス此  
 故ニ土地ハ大家産ハ貴族共治政体トハ親シク



連累スルモハタルハミナラス其實此政體ヲ維持スルニハ欠クヘカラサルモノナリ當時ノ慣習タル一種特別ノ方法ヲ設ケ大家産ヲ保護シテ漫ニ之ヲ分割セシメサル所以ハ此理ニ外ナラサルナリ彼ノ英國ニ於ルカ如ク一朝ノ大革命ヲ以テ封建貴族ヲ顛覆セス社會ノ改良ヲシテ自然ノ大勢ニ任スル西歐羅巴諸國ニ於テ今日尚土地大家産ノ遺存スルモ亦此理ニ因ルナルヘシ

經濟上ノ點ヨリ論スレハ土地大家産ハ些少ノ

人員ニ巨額ノ收入ヲ占得セシメ之ニ反シ小家庭ハ割合ニハ總額ノ產出高ヲ多カラシメテ而シテ多數ノ人口ヲ養フニ足ルモノトス是レ一般ノ通則ナリ

實ニ土地ヲ小家庭ニ分割シタル國ニ於テハ(今此處ニテハ理論ヲ簡明ナラシメンカ為メ學術ノ功用ヲ用キタル農耕ノ場合ハ措テ問ハサルナリ)農夫ハ唯鋤鋤ノカヲ假リテ其土地ヨリ一家族ヲ給養スルニ足レル收穫ヲ為サヘルヘカラス蓋シ小耕作ヲ以テハ之ヲダモ收ムルニ餘

リ間暇ノ生産ニハ非サルノミナラス時トシテ  
ハ之カ為ニ非常ノ勤勞ヲ要スヘシ蓋シ同一農  
夫ニシテ今ヨリ二倍ノ土地ヲ耕作セハ今飼フ  
所ノ一牝羊ニ非スシテ一牝牛ヲ飼フヲ得ヘ  
ク又一牝牛ニ非スシテ一馬匹ヲ飼フヲ得テ  
之カ為ニ別段二倍ノ勞ヲ要セサルノミナラス  
耕作更ニ容易ニシテ隨テ年々ノ所得モ亦更ニ  
倍蕪スヘシ然レモ小耕作ハ斯ク農耕ノ理ニ背  
クモ現在ノ學術ト財本トヲ以テシテハ其カノ  
及ホス丈ケハ年々土地自然ノ膏血ヲ絞取レリ

實ニ小家産ハ農夫カ各自ニ得ル所ノ純益ハ些  
少ニシテ或ハ毫モ餘裕ナク各自ノ需要ニ充ル  
ニ止ルヲアリトイヘモ廣狹同一ナル地ヲ以テ  
セハ土地ヲ大家産ニ分チタル地方ニ比スハハ  
之ヨリ産出スル物品ノ總額ト之ヲ消費シテ生  
活スル人負ハ多寡トハ多キヲ論テ待カスシテ  
明ラカナリ  
己ニ云フカ如ク前ノ所論ハ國ニ百工製造ノ開  
ケタル場合ハ措テ問ハサル所ナリ實ニ工業繁  
盛ナル國ニ在テハ同一地方ニ數多人民ヲ羣居

セシノテ物品ヲ消費スルノ中心ト為リ其地方  
 人口ノ増植ニ影響ヲ生スルト小家産ヨリ更ニ  
 甚シキモノトス看ヨリリムザン 佛國中央地方  
 ハ小耕作ノ行ハル、處ナレレ工業未タ盛ナラ  
 サルカユヘニ其人口ハ大中耕作行ハレテ而シ  
 テ百工製造ノ最モ旺盛ナルフランドルニ比ス  
 レハ遙ニ寡キヲ  
 大家産ト小家産トハ自ラ其利害得失ヲ異ニセ  
 リ廣大ナル土地ノ持主ハ固ヨリ其土地ヨリ産  
 出スル所ノ物品ヲ悉ク消費セサルカユヘニ其

目的トスル所ハ勉メテ同一地ノ産力ヲ竭盡シ  
 テ許多ノ物品ヲ産出セントスルニ非ラス夫ノ  
 新國ニ於ルカ如キ方法ヲ用テ勉メテ賣品ト為  
 ルヘキ貨物ヲ夥多産出シテ多額ノ純益ヲ收メ  
 ント欲スルニ在リ故ニ其廣大ナル土地中ニハ  
 最モ些少ノ勤勞ト最モ少數ノ牧者トヲ用テ  
 饒多ノ牛羊ヲ保養スルヲ得ヘキ牧地ヲ廣張ス  
 ルニ注意スヘシ且其領内ニ在ル森林ヲ維持ス  
 ルノ費用ハ尚寡小ナルノミナラス之ニ入テ禽  
 獸ヲ狩ルノ快樂ヲ得セシムルニヨリ措テ之ヲ

保存スヘシ要スルニ其所有者若シ有餘ノ資本  
ヲ所持スル人タラハ完全ナル農具器械ト充分  
ノ肥料ト耕夫トヲ用キテ其土地ヲ耕種スヘシ  
之ニ反シ地主若シ資本ニ乏シキ人タラハ曠野  
ノ耕作(即チ故ラニ肥料ヲ用キス數多ノ土地ハ  
荒蕪ニ委シテ自然ニ其生産カヲ恢復スルヲ待  
テ交耕作スルノ法)ヲ為スヘシ此方法ニ據レハ  
廣大ノ面積ヨリ年々收穫スル所ハ割合ニ少ナ  
ケレド耕夫ノ給料及ヒ其他ノ雜費ハ最モ少カ  
ルヘシ是レ土地ヲ大家産ニ分チタル國ニ於テ

屢行ハル、所ナリ若シ地主タル者其土地ヨリ  
收入スル所ノモノ、外ニ所得ノ入ルヘキ路ナ  
キハ年々出入平均シテ土地ニ脩繕ヲ施スノ  
餘裕ナカルヘシ若シ又貸舍若クハ工場ヲ有  
シ之ヨリ別途ノ收入ヲ得テ之ヲ其土地ニ入ル  
ルニ當テモ之ヲ一千町歩ノ廣大ナル面積ニ施  
シタルト小耕作ニテ僅ニ其十分一ノ面積ニ施  
シタルトハ其効驗豈霄壤ノ差ナランヤ之ニ加  
フルニ斯ル大家産ノ多キ國々ニ於テハ全體社  
會ノ組織モ自ラ一種ノ軀裁ヲ為シテ小家産ノ

行ハル、國ニ比スレハ概シテ各人ノ勉強力少  
キノミナラス盛大ナル工作場モ亦僅火ナリ之  
ヲ要スルニ素封家ハ年々坐シテ多額ノ收入ヲ  
得ルニ甘シ多クハ無益ニ浪費シテ敢テ節儉ヲ  
行ハサルニヨリ財本ヲ所持スルモノハ殆ト稀  
ナリ  
加之土地所有主ハ自ラ之ヲ耕作スルモ或ハ一  
人ノ大農ニ貸シテ耕サシムルモ其局必ス常ニ  
左ノ決ニ歸スヘシ曰ク土地ハ大家産ハ其所有  
主ハ所財ト爲ルハ純益ハ多クハ其地方ハ

農民ハ寡カハシト

讀者審ニ此純益産ノ主意ヲ了解スルヲ要ス爰  
ニ説ク所ハ其地主一人ノ所有ニ属スル毎町歩  
ノ純益産ヨリ成レル收入ナリ見ルヘシ地主タ  
ル者平均一百町歩ヲ有スル國ニ於テハ各地主  
ノ平均所用ト爲ルヘキ純益産ハ僅ニ毎二町歩  
ヲ有セル地主ノ多キ國ヨリハ遙ニ多キヲ又一  
方ノ點ヨリ論シテ地主各自所有ノ多寡ヲ問ハ  
ス唯田畝ハ各町歩ヨリ得ル所ノ平均純益産ヲ  
以テスレハ其論題ハ全ク異ニシテ大家産ハ小

家産ノ利ナルニ如カサルナリ。パツシー氏曰ク佛國ニ於テ小耕作ハ一町歩ヨリ得ル所ハ純益産ハ大耕作ハ一町歩ヨリ得ル所ハ者ヨリ遙ニ多シト。

○土地家産ヲ分派スル。前ノ法則ニハ又自ラ例外ノ場合アリ。今之ヲ論究スルニ先ツテ暫ラク其實況ヲ究明セン例ヘハ愛蘭土ニ於テ其土地ハ殆ト全ク大家産ニ歸シテ頻年農民ハ大ニ窮乏ニ陥リ殆ト飢餓ニ垂ントセリ是レ外ナラス。該國ハ近世ニ至リ英人ノ畧奪スル所ニ

シテ其土地ハ皆英人ノ所有ニ歸シタルノミナラス。以來大ニ其土民ヲ壓制シテ之ニ百工製造ノ業ヲ禁シ地方經濟自然ノ活動力ヲ阻遏シタルカエヘナリ。又英蘭土ニ於テハ土地ハ専ラ大家産ニ分割スレバ其人口ハ極メテ稠密ナリ試ニ其統計表ニ就テ考フルニ此夥多ノ人口中地方ニ在テ農業ヲ生産トスル者ハ寡少ニシテ百工製造ノ旺盛ナル都會ニ生活スルモノ最モ多キニ居トリ。

佛國ニ於テハ今日尚農民ノ數過多ニ居テ其農



政ハ專ラ小家産ナリ蓋シ此國ニ於テハ大革命前ニ在テモ已ニ小家産ノ制ハ往々見ル所ナリシカ以來此制全ク執カラ得テ專ラ國中ニ行ハル、ニ至レリ當時撰定セル民法ハ凡ソ父母タル者遺言ナクンテ死セハ其所有地ヲ公平ニ諸子ノ中ニ配分スルモノトシ且父母ノ遺言スルニ當テモ亦其配當ノ多寡ヲ定メ以テ大ニ其制ヲ維持シタリ

人或ハ曰ク佛國民法ハ斯ル規則ヲ設ケ土地ヲ分割セシメテ大ニ耕作ニ損害ヲ及ホシタリ

ト此説タル事實ニ徴セスシテ漫ニ喋々スルモノト去フベキナリ請フ其然ラサル所以ヲ説明セン看ヨ一千八百十五年ニ在テハ地主ノ員數ハ一千萬人ナリシカ一千八百五十三年ニ至リテハ人口ハ三分一ノ増加ヲ致シタルニ地主ノ數ハ殆ト一千三百萬人ニシテ亦幾ト三分一ヲ増加シタルヲ

斯ク地生ノ増加ハ人口ノ増加ト彼是善ク平均シテ其過多ニ至ラサル所以ハ何ソヤ今之ヲ究明セサルヘカラス蓋シ其國法ニ由リ人死セハ

隨テ其所有地ヲ分派スルノ結果ヲ致シ年々平均シテ二十有餘萬ノ地主ハ實子又ハ近縁者ニ相續セシムルカ為ニ其所有地ヲ一時ニ二分若クハ三部分ニ分割ストイヘ其實斯ク常ニ分割スルニ至テサルモノアリ何トナレハ其死後他人ニ之ヲ賣却スルノ際其分派シタル各地ヲ併合シテ往々一人ノ購求者ニ賣ルヲアレハナリ是レ第一備考ニ供スヘキモノナリ第二男女婚娶ニ由テ其各親ヨリ配分サレタル部分ヲ一家産ニ合併スルアリ又勤勉者ハ動産或ハ不動

産ヲ得ントニ汲々トシテ頻ニ節儉ヲ行ヒ漸々ニ土地ヲ購求シ中等地主ト為ルノミナラス遂ニハ土地ノ大家産ヲ興スニ至ル者少ナカラス是レ富有ナル理財家ノ大利ヲ圖ルト一般ニ農民ノ期スル所ノ大望ナリ此故ニ土地ニハ恰モ東西ヨリ殆ト同時ニ同勢カラ以テ働クノ理ニシテ即チ人死シテ其所有地ヲ諸子ノ中ニ分派スル者アレハ一方ニハ婚姻又ハ節儉ニ由テ之ヲ聚合スルモノアリ之ヲ要スルニ第一ノ原因ニ由テハ小地主ノ員

數ヲ増加シ第二ノ原因ニ由リテハ首トシテ中等地主ヲ生スルニ至ルモノナリ

左ニ掲クル統計ハ以テ民法カ農耕ノ道ニ損害ヲ及ホントリトノ謬説ヲ排斥スルニ足ルヘシ

曰ク一千七百年代ハ終末ニハ佛全國私有地ハ價額ハ二百五十億フランクニシテ之ヨリ年々産出スル所ハ農産價ハ二十五億ナラスヤ而シテ今日ハ其統計表ニ據ハハ地價五百五十億フランク或ハ六百億フランクニシテ其農産價ハ最近ハ計表ニ據ハハ五十億フランク又ハ二倍

有餘ト為セリ是レ民法頒布ノ毫モ耕作ヲ害セサルヲ見ルニ足ルノ證トス

問フ者アリ曰ク殊ニ土地ニ價格ヲ得セシムルモノハ何ソヤ勤勞ト財本是レナリ故ニ農家ノ經濟ハ最モ善ク此二者ヲ流用シテ地味ヲ肥沃ナラシムルニ在リ然ルニ耕耘ノ方法ノ最モ周密ニ行届クモノハ小家産ニ如クモノナク又充分ニ財本ヲ施シテ地味ヲ改良スルヲ得ルモノハ工業ニ由リ積蓄シタル資本ヲ以テ購求シタル中等家産ニ在リトス

小家産ハ共和政體ヲ保全スル國ニ於テ最モ便  
利ナリトス總テ小地主ハ其所有地ハ自家ノ生  
計ヲ給スニ足ラス又他ニ所有スル物品トテモ  
其居住スル小舎ニ過キサレモ要スルニ毫モ自  
己ノ所有ナキ傭夫ニ比スレハ能ク其郷里ニ固  
着シテ離レサルナリ固ヨリ斯ル些細ノ土地  
ハ資産トモ云ヒ難シトイヘモ日傭稼人ハ間暇  
ノ時之ヲ耕作シテ生計ノ資ト為スヲ得ヘケレ  
ハナリ是レ宛モ小民ノ節儉ニシテ蓄積シタル  
資財ノ如キモノナリ凡ソ人ノ事ヲ執ルヤ專ラ

自己ノ利害ヲ計ル片ハ他人ニ服事スルノ日ニ  
ハ決シテ能ハサル所ノ勇氣ヲ發生スルモノナ  
レハ自己ノ土地ヲ耕作スル小農ノ手ニ在テハ  
小家産ハ日ニ益肥饒ト為ルナリ概シテ小耕作  
ニ在テハ産出總額ハ饒多ナリ既ニ云カ如ク毎  
反歩ノ純産ハ甚タ多ク殊ニ菜園耕作ニ於テハ  
最モ著シキナリ

小家産ノ不利ハ人口ノ過多ナルニ在リ假令ハ  
ハ某ノ村落ニハ一年中七八月ノ間ハ五十人ノ  
雇夫ヲ使役スル大農家アリ然ルニ自ラ生計ヲ

給スニ足ラサル少許ノ田宅ヲ有シ此ニ戀々シ  
 テ其土地ヲ離レサル小民一百口アリトセハ此  
 場合ニ大農家ニ雇ハルヘキ人貧ハ固ヨリ五十  
 人ヲ以テ足レルカユヘニ若シ其人口五十人ニ  
 止ラハ一村安全ニ生活ヲ營ムヲ得ヘケレト一  
 百口アルカ為メ各自最モ生計ニ苦シメリ然レ  
 氏此等ノ過多ノ小民ハ百工製造ノ盛大ナル都  
 邑ニ散シテ自然此過不及ヲ減スルニ至ルモノ  
 ナリ  
 又小家産ニハコレニ劣ラサル重大ノ不利アリ

現今佛蘭西ノ一千三百萬ノ土地家産ハ一億一  
 千萬ノ田野邸宅ニ區分セリ此等ノ小區ノ彼是  
 互ニ密接スルト又互ニ其懸隔スルトニヨリ耕  
 作人ハ空シク時間ヲ費ヤスノミオラス耕耘ノ  
 方法ヲ變易改良スルヲ妨害シ隨テ地主ノ間ニ  
 ハ境界等ノ爭論ヲ引起スノ根源ト為レリ  
 大小家産トハ大小相對スルヲ謂フ佛國ノ中央  
 ニ於テハ凡ソ五エクタール一エクタールハ凡ソ  
 我ハ反餘歩ニ當ルヨ  
 リ六百エクタールニ至ルノ所有地ヲ大家産トシ  
 フランドルニ於テハ五十エクタールヨリ一百エ

クタルニ至ル者ヲ大家産トス。土耳機坦部落ノ  
 游牧ヲ生産ト為ス。人民ニ在テハ之ト一様ナル  
 廣狹ノ面積ヲ以テハ辛フシテ生計ヲ立ルニ過  
 キス。此蠻民中ニテ大家産ト稱スヘキ者ハ蓋シ  
 數千萬エクタルノ土地ヲ要スヘシ。凡ソ大家産  
 ヲ成スニハ其國ノ地價益貴ケレハ其要スル所  
 ノ土地ハ愈以ナカルヘシ。  
 ○地主及ヒ農夫ノト。既ニ説論スル所ハ地主  
 自カラ其土地ヲ耕作スルモノト假定シタルナ  
 リ。實ニ此事タル屢小家産ノ間ニ行ハル、モノ

ナリトイヘ氏大家産ニハ稀有ノトナリトス  
 僅ニ一項ノ田畝ヲ有スル農家ハ之ヲ耕作スル  
 ニ自己家族ノカヲ以テ充分餘リアリトイヘ氏  
 廣大ナル地方ヲ有スル者ハ之ヲ耕作スルニハ  
 數多ノ耕夫ヲ用キサルヘカラス。往時ハ地主ハ  
 ル者ハ各自奴隸ヲ養ヘリ。此ハ羅馬帝國末葉ノ  
 頃ニハ世々其耕作セル土地ノ土着ト為リ中世  
 ニ至リテハ其地主ニ向テ地産ノ一分ヲ貢納シ  
 又地主自ラ耕作スル土地ノ耕作ヲ助クルヲ例  
 トセリ。此農政ハ素ト威力壓制主義ニ出テタル



モノナレハ斯ハル半開ノ世ニ在テハ或ハ必要  
ナリシモ國家ノ富有ヲ進捗シ人權ノ自由ヲ發  
動スルニハ最大ノ妨害ヲ為シタルヤ必セリ已  
ニシテ人ノ自由ト富有トノ力能ク此等ノ妨害  
ヲ一掃スルヲ得ヘキノ日ニ在テハ此農政ハ全  
ク其跡ヲ絶ツニ至ルナリ此箱束法ハ一時大ニ  
行ハレタリシカ今日ハ佛國ニ於テハ他ノ文明  
諸國ト一般ニ地主ト農民トノ關係ハ相互自由  
ノ約束ニシテ之ヲ束縛スルカ如キノ弊習ハ行  
ハレサルナリ

此定約ハ他事ニ就テ人々ノ間ニ自由ニ約スル  
所ノモノト比シク其方法種々アリ近年行ハル  
、所ノ借地方ニ三様ノ大別アリ即チ收穫折半  
小作法定約小作法及ヒ九十九年開定約小作法  
是レナリ此第三法ハ佛國ニ於テハ稀ニ行ハル  
、モノナリ  
借地ニハ必ス地租アルモノトス例ヘハ爰ニ一  
項ノ田アリ農夫一週年刻苦シテ之ヲ耕ヤスモ  
其收穫ハ肥料及ヒ農具等ノ雜費ヲ引去リテ僅  
ニ一家ノ生計ヲ給スニ止ラハ斯ハル土地ハ誰

カ地租ヲ出シテ借ルコトヲセシヤ又其所有主ト  
 イヘ比何等ノ餘澤アリテ斯ナル土地ヲ他人ニ  
 貸シテ地代ヲ要求スルヲ得シヤ之ニ反シテ其  
 土地ノ收穫ハ凡百ノ雜費ヲ引去リテ尚餘裕ア  
 ラハ地主ハ即チ他ノ農人ニ向テ斯ク謂フコトヲ  
 得ン曰ク余ハ汝ニ此土地ヲ貸與スヘシ然シテ  
 其年々ノ純益ハ汝ト共ニ之ヲ分ツヘシ即チ其  
 一部分ハ地租トシテ余ニ容レ其他ノ一分ヲ以  
 テ汝ノ功勞ニ酬ユヘシト是ニ於テ貸借約束直  
 ニ成ル是レ此地主ノ取ルヘキ部分ハ即チ小作

價ナリ

問フ者アリ曰ク小作價ハ地租ト同一ノモノト  
 ルヤト此問題ハ詳ニ此ニ答辯セス質疑者須ラ  
 ク需要供給ノ理ニ由テ之ヲ考究セサルヘカラ  
 ス蓋シ地主ハ各自成丈高價ニ之ヲ借ンコトヲ圖  
 ルモノニシテ畢竟土地ノ純益ヲ相分ツヲ常ト  
 ス然ルニ地主ハ我所有物ナレハ自由ニ之ヲ處  
 分スルコトヲ得ルカユヘニ若シ小作人カ申出ス  
 所ノ價我意ニ合ナハザレハ然ラハ余ハ自ラ之  
 ヲ耕作スヘシト云ハン此時ニ臨ミ小作人ハ其

借地ハ我生計ノ資ナレハ然ラハ之ヲ汝ニ戻ス  
 ヘシト云ヒ難カルヘシ然レモ争テカ地主等一  
 同申合セテ之ヲ主張スルヲ得ベケンヤ蓋シ小  
 作人ニ於テ一ノ頼ムヘキモノハ地主中ニ競争  
 心行ハル、是ナリ即チ甲ノ地主此價ナラデハ  
 貸サヌト云ヘハ乙ノ地主ハ其價ヲ以テ我土地  
 ヲ貸スヘシト云ハシ是レ二三ノ地主其地方ヲ  
 有スル場合ニ在テハ固ヨリ行ハルヘカラサレ  
 凡土地中小家産ニ區分スル地方譯者按スルニ  
 我國ノ現状ハ  
 即チ是ニ在テハ行ハルヘクシテ小家産ノ國民

ニ利益ヲ致スノ一證ナリ且又地主ハ自ラ之ヲ  
 耕ヤスニ比スレハ多少ノ損失アルモ之ヲ小作  
 セシムレハ豊凶ニ拘ラス年々一定ノ收入ヲ得  
 ルノ安心アレ凡小作人ハ四時ノ不順市場ノ變  
 動又ハ疫癘等ノ為ニ一朝ニ家畜ヲ失フテ非常  
 ノ損害ヲ受ルノ患アリ故ニ地主ヨリ更ニ多分  
 ノ利益ヲ收メテ此等ノ損失ニ備ヘサルヲ得ス  
 此故ニ小作人甚タ多ク大家産主甚タ少キ地方  
 ニ在テハ小作價ハ小作人ノ競争ニ由テ定マレ  
 リ斯、ル地方ニテ小作人等ノ互ニ競ツテ土地

ヲ要求スルノ有様ハ彼ノ破船ニ會フテ食料欠  
 乏セル孤島ニ上陸シタル者カ互ニ一片ノ麵包  
 ヲ爭フニ異ナラス損益ダモ顧ミズ妄ニ高價ノ  
 小作價ヲ申出シテ之ヲ借ント欲ス是レ愛爾蘭  
 ノ民狀ヲシテ斯ク困窮ニ陥ラシメタル原因ナ  
 リ又政府ノ威カヲ以テ土地ヲ分割スル方法ハ  
 多クハ之ト一般ノ結果ヲ生スルモノナリ  
 凡ソ耕地ハ廣狹ハ通常土地ハ形狀及ヒ地質若  
 シハ賣捌方ハ模様并ニ耕作ニ必用ナル財本ニ  
 由テ定マルモハトス故ニボス及ヒブリノ如

キ耕作ニ便利ナル良土ヲ以テ成レル平坦ノ廣  
 野ニ於テハ廣大ナル田野ヲ作り又アーゲ及ヒ  
 コタンテンノ山谷ノ如キハ廣大ナル牧草地ア  
 リ之ニ反シアーヴェルギユ ボウジユロルロインノ  
 如キ高低起伏ノ土地或ハ巴里及ヒアンジュ  
 如キ多分ニ果物野菜ヲ消費スルノミナラズ其  
 賣買盛昌ナル大都會ノ近傍ニテハ田圃ハ片々  
 タル小區ニ分割セリ又佛國ノ北部ニ在テハ每  
 エクタールニ費ヤス財本ハ一千五百フランクヨ  
 リ二千フランクノ多キニ到ルカユヘニ止ムヲ

ヲ得スボースヨリ其田圃ノ廣狹ヲ限ルニ至レ  
リボースニ於テハ其財本ハ通常毎エクタルニ  
五百「フ」ランクヲ以テ足レリト云フ  
此等ノ法ハ時トシテ土地ノ大小家産ニ生スル  
不利ヲ減スルノ益アリ例ヘハボース地方ニ於  
テ一人ノ小作農夫ニシテ往々數名ノ地主ヨリ  
借耕スルモノアリ又アールベルギ地方ニ於テハ  
一人ノ地主其耕地ヲ分割シテ數名ノ小作人ニ  
借スカ如キ是ナリ且又土壤漸ク肥沃ト為リ隨  
テ耕作ノ費用モ亦増加セル地方ニ在テハ其地

主ハ從前一人ノ小作人ニ貸與シタル田圃ヲ二  
分シテ二名ノ小作人ニ貸與スルニ至ルヲアリ  
此故ニ讀者冒シク所有地ノ大中小ト耕作ノ大  
中小トヲ混同スルヲ勿レ然レハ事物自然ノ勢  
ノ致ス所漸ク社會ノ組織ヲ調和シテ事々物々  
當時ノ需用ニ適セシムルモノナレハ大耕作ノ  
行ハル、地方ニハ自ラ大家産多ク小耕作ノ盛  
行スル處ニハ又自ラ小家産ノ多キモノナリ  
○定約小作法 小作人トハ地價トシテ年々一  
定ノ金額若クハ金額ト收穫物トヲ相半スルカ

孰レカ若干ノ多寡ヲ納ノ其他數條ノ約ヲ定メ  
テ某ノ土地ヲ借耕スル者ヲ云フナリ此借地法  
ハ凡ソ富國ニハ最モ多ク且概ネ土地ヨリ最多  
ハ物産ヲ收穫スルヲ得ルニヨリ至極便益ナリ  
トス

此便益ノ重ナル者ハ即チ農夫ハ其地主ニ對シ  
地價トシテ年々ノ定額ヲ拂ヒ且取結ヒタル定  
約ヲ守レハ自己ノ私有物ノ如ク自儘ニ之ヲ使  
用シカノテ地産ヲ増加シテ純益ヲ收ムルヲ得  
ヘシ是即チ土地ヲ自由ニ耕作人ニ取扱ハシム

ルノ方ニシテ最モ一身ノ損益ヲ顧ミルノ意ヲ  
鼓舞スルモノナリ

然レ氏此法ハ小作人タル者農具家畜及ヒ肥料  
ヲ供フルノミナラス或ハ其秋收シタル物品ヲ  
未タ販賣セサルニ先タツテ地主ニ拂フヘキ小  
作金ヲモ貯フルニ足ルヘキ財本ヲ備ヘサレハ  
之ヲ行フ能ハス故ニ此方法ハ小作人タル者百  
工製造ニ於ルカ如ク豫テ財本ヲ備ヘテ借地セ  
ル者ト看做サ、ルヘカラス  
如何セン世ニ一事一物ノ完全セル者ナキヲ此

借地法トイヘテ決シテ完全ヲ致スモノト為ス  
ヘカラス其不便益ノ最モナル者ハ小作人其土  
地ヲ自由ニ處分スルヲ得ルハ借用中一時ノ  
ニシテ必ス此ニ年限アルカエヘニ其間至大ノ  
純益ヲ收メント欲シ頻リニ地力ヲ吸涸シテ之  
ニ充ふノ肥料其他ノ改良ヲ施サ、ルニ在リ是  
レ即チ後日恢復ヲ期シ難キ損害ヲ醸スモノナ  
リ尤モ初ノ土地ヲ貸與スルノ際別ニ約束ヲ立  
テ、之ヲ貸セハ多ク免カル、ヲ得ヘキモノニ  
シテ特ニ小作ノ期限ヲ永カラシムハ小作人ハ

其年々ノ損益ヲ土地ノ肥瘠ト相共ニスルノ状  
アルヘシ

一千七百八十九年前ニハ佛國ニ於テハ定約小  
作ハ今日ヨリ更ニ小必ナリ是レ社會組織ノ然  
ラシムルニ因ルノミナラス國法ニ由リ九十年  
有餘ナル年限ノ小作地ニハ重税ヲ課シ而シテ  
之ヲ負擔スル者ニハ地主ト定例ノ約束中若干  
ノ箇條ハ之ヲ履行セスシテ可ナル權利ヲ附與  
シタルニヨリ地主ニ於テ永年ノ小作定約ヲ結  
ブモノハ殆ト稀ナルカエヘナリ斯、ル弊害ハ



今日ノ社會ニ於テハ一掃セシトイヘト要スル  
 = 佛國ノ各地方ニ於テ尚永年ノ小作條約ハ稀  
 = 見ル所ナリ

○收獲折半小作法 此法ハ前ニ掲ケタル者ト  
 ハ全ク相反シタル事故アリ尤モ此ハ通常貧國  
 ニ行ハル、モノニシテ近年ニ至ルマテ佛國內  
 ニモ僻陬寒村ニ至テハ尚行ハレタリ此法ニテ  
 ハ小作人ハ毫モ財本ヲ有セス唯土地ニ勞力ヲ  
 施スノミニシテ地主ハ土地ノ外ニ收納屋牛舎  
 農具等一切ノ者ヲ供シ耕夫ハ勤勞ヲ供シテ其

因テ生スル所ノ物産ヲ相共ニ配分センカ為ニ  
 協同セル一種ノ結社ト云フ可キナリ此場合ニ  
 於テ物産ハ折半ニ分ツヲ例トス折半小作法ト  
 ハ此謂ナリ

地主ヨリ貸ス所ノ動財本ヲセプトタルト云フ蓋  
 シ折半小作法ノミナラス定約小作ニ於テモ地  
 主ヨリ動財本ヲ貸スコトアリ尤モ定約小作ノ場  
 合ニ於テハ大抵家畜ヲ貸スニ止ルモノトス

ラウイルギト氏佛國有名ノ農學家ハ凡ソ國ニ耕作ノ道  
 ヲ旺盛ナラシムルニハ左ノ三ヶ條ニ因レリト

為ス曰ク數年ノ勤勞ヲ加ヘテ善ク整頓シタル  
肥地ト多額ノ財本ト農民ノ知識トナリ此言頗  
ル適切ナリト云フヘシ蓋シ財本ヲ豊備スルニ  
非レハ決シテ土地ヲ改良スルヲ能ハス且農民  
只筋骨ヲ有スルノミニシテ知識ニ乏シケレハ  
又財本ノ豊備スル謂レナキナリ之ヲ概スルニ  
貧國ニ於テハ此知識ヲ發育スルヲ方便ヲ得サ  
ルヘシ是レ折半小作法ハ通常貧國ニ行ハルハ  
亦必ナリ其一大不利ハパスシー氏ノ明言スル  
カ如ク人權ノ自由ヲ妨害シテ完全ナル耕作法

ヲ採用スルノ路ヲ阻スルニ在リ  
此法ニモ亦利益ト為ルノ場合ナキニシモアテ  
ス第一ニ爰ニ一地方アリ之ニ器械術ヲ加ヘテ  
灌溉ヲ布及スルカ若クハ放水ノ便ヲ疏通スル  
時ハ瘠土ヲ變シテ沃壤ト為スコヲ得ルノ見込  
アレハ其地主ハ定約小作法ヨリハ折半小作法  
ニ據ルヲ利トスヘシ此場合ニハ地主ハ小作人  
ト圖リ其容易ニ資辯シカタキ費用ハ自ラ辯シ  
テ其土地ヲ改良スルヲ得ヘケレハナリ彼ノ巧  
ニ灌溉ヲ布及シタルロトンバルジノ廣野ノ

如キ者は是ナリ第二ハ其一方ノ所有者若シ資本ニ富ミ且農學ニ通スルノ人タラハ尚折半小作法ヲ以テ貸付ルヲ利トスヘシ何トナレハ此法ニ於テハ萬事自ラ關涉スルヲ得ルニ由リ耕作人ヲ指揮スルヲ得レハナリ若又小作人牛羊及ヒ農具等ノ如キ資本ヲ所有セハ彼ハ我知識ト我勤勞ト我資本トヲ供シ地主モ亦我知識ト土地ヲ供ヘ且肥料ヲ購求スルカ若クハ地味ヲ改良スルカ若クハ新工夫ノ耕法ヲ興スカ如キ多額ノ資本ヲ要スルノ場合ニハ之ヲ給與シテ

共同ノ利益ヲ料ルコアルベシ此場合ニ於テ若シ地主農事ヲ勉ムルノ念盛ナレハ此小作法ハ常ニ例外ノ利益タルノミナラス現ニ佛國ノメイン及ヒブールボンノ肥沃ノ野ニ於ルカ如ク一定ノ規則ト為ルヘシ而シテ折半小作法ノ此ノ如キニ至レルモノハ良地ト智識ト資本トノ三者ヲ併合シタル農事改良ノ一手段ナリトスヘシ

農工商經濟論卷之一 終

331  
L 57(1)

本草綱目

卷一

昆蟲類



